

知られざる日常と本音

大島 行雲

布団の中で身悶える。

目を覚ますと暗い。「何時だろう?」と枕元の目覚まし時計を手にする。針は一本しかない。

下半身が熱い。

若い女の股間を覆う黒い下着。切れ上がった小股。滑らかに揺れる薄茶色の長い髪。甘い、甘える様な声。

寒い。厭になる。出たくない。厭世感。このまま仕事も何もかも辞めてしまおうか。そう、何もかも。

下界には、いつもの世界が広がっている。狭く薄汚れた小さな世界。どこに行っても逃れられない。

僕らは何の為に生きてるの?

馬鹿な事を。食う為に決まってるじゃないか。

機械仕掛けの如く食事を作る。機械仕掛けの如く電車に乗り、機械仕掛けの如く仕事をする。

「ゆい……」

未だに思い出す。何年経てば忘れられるのか。いつまで経っても、その名を呟いている。もう、友人は皆、結婚した。子どもも大きくなった。俺は結婚できそうにない。しそうにないんじゃない。できそうにないのだ。未だ、あの名を呟き続けてい

る限り。

救いはない。逃げ場もない。忘れないとしても、ただのいい思い出にできれば。でも、僕は呪縛から逃れられない。誰よりも過去に固執しているのかもしれない。誰よりも現実的で誰よりも未来を見ている筈なのに。

取り残されている。

何から?

全てから。

これで教師なのだから笑わせる。生徒は誰一人として僕のような教師を信用などしていない。たとえ、彼らの事を家に帰ってからも考えていようと、彼らは教師の事など一片も頭にない。人懐っこい笑顔で卒業して、二度と会う事はない。近い内、僕のような輩は女子高生への痴漢で逮捕されるのかもしれない。冤罪か否か、それは当人にしか分からない。少なくともキリスト教的な罪なら、とつくの昔に僕は死刑で地獄行きだ。天国に行けると思うほど暢気じゃない。

それなら、何が怖いってんだ?

生きる事だよ。

人生に意味はない。だが、僕は意味を作る事もできない。

どうして?

だって、取り残されてるじゃないか。

何から?

全てからだよ。

これまで、ずっと戦ってきた。努力すれば、何とかなる筈だと信じてきた。信じようとしてきた。

でも、最近、すっかり自信がなくなつた。

努力？ それで？

壁にぶち当たって何年が経つだろう？

もう、考えるのも厭になつてきた。

何も変わらない。そう呟いた時から、ずっと何も変わらない。

「ゆい……何とかしてくれよ」

また、性懲りもなく呟いてしまう。美しかった日々。落ちて

いく夕日。冷たい風。走る。最高の笑顔。

おまえの為なら死ねたのに。

あの時、死んでおけば。

今となつては証明する事もできない。

失つてから、その大きさを知る。言い古された言葉だが、真

実だ。

目の前には真っ白い霧。傍を通り過ぎる車の姿も見えない。

多分、今もまた、失つてから知る何かがあるのだろう。それは

分かっている、それが何かは分からない。

幻だと分かっている。永遠に手にできないものだと分かっている。

誰かが言った。過去を忘れられないのか、その時の自分を

を忘れたくないのか。どっちだっていいじゃないか。つまり、

今が厭なんだよ。あの時から滑り落ちていつてる気分なんだ。

いつだって、タイミングが悪いんだよ。

あの時から。

電線の上には無数の椋鳥。糞で白く点描されたアスファルト。

彼らも生きている。烏も犬も、ゴキブリさえも。

失つてから。失つてから。失つてから。

男女平等。生物は？

食べる為に殺すんだから。食べる為？

「クソツ！」

誰にともなく毒づく。

世界を焼き尽くす事も、世界を笑い飛ばす事もできない。

自分の力じゃ、どうにもならない。でも、誰の力も当てにな

らない。外からは何も来ない。内にも何も無い。

動物になろう。

機械になろう。

それでいいのか？

生きるのが辛いんだよ。

贅沢なのは分かっている。世界のあちこちで飢えてる人がいる。

殺されていく人がいる。解雇されたり、暴力を受けたり。

でも、人にとって大事なのは目の前のパンなんだよ。

沖縄で問題なのは在日米軍よりも失業率なんだ。

それなら、いいじゃないか。ちゃんと食ってる。

「クソッ!!」

誰にともなく毒づく。

それでいいのか?

「ゆい………何とかしてくれよ」